

玉造教会ニュース

6月号

発行：玉造教会 評議会

編集：玉造教会 広報委員会

# シャローム

〒540-0004

大阪府中央区玉造2-24-22

TEL 06-6941-2332

FAX 06-6941-2605

2016年6月5日

403号

## イエス様、灯火

崔 周永 神父

哲学、お好きですか、と訊かれたら皆さんはどんな返事をされるのでしょうか。

「哲学、そんな堅苦しいこと言わんといて」、

「いいんじゃないですか、格好良くて」、

「一体哲学って何の役に立つの」など、反応は色々でしょう。

次いでに、もう一つ質問させていただきます。言葉についてです。わたし達が言葉を操っているのでしょうか。言葉がわたし達を操っているのでしょうか。言い換えますと、言葉の主人、言葉を支配しているのはわたし達でしょうか。もしかして、言葉がわたし達人間を形作っていくのでは、と思われたことありませんでしょうか。

良い質問に良い答えが得られるという西洋の格言があります。的確な状況にぴったりの言葉を選べること、それが良い質問に繋がることですし、良い答えにも辿り着けるもとでしょう。普段何気なく使っている言葉、その言葉は実は大したものなのです。言葉使いを大事にすればするほど、言葉はその力を増していくのです。そういった意味で言葉を使って、概念を鋭く定義していく、またそれらの概念を持って物事を深く追及していく哲学の大事さは言うまでもないのです。哲学と言ってもしっくりこないかもしれませんが、日常で営まれている精神活動が実は哲学的なものなのです。どうすればいいのか、という問い。普段問うている質問が正にそれなのです。

常々人間の不思議さに気付かされるのですけれども、世間を騒がせる犯罪事件を通しては、人間、あんなに酷いことも出来るのだ、と。一体、彼女・彼をあそこまでそそのかしたのは何なのか、と思いに耽ったりします。身近には、典礼歴で祝っている数多くの聖人たちのことを思い出すと、犯罪者と違う意味で人間の不思議さを思い出されます。こんなに素晴らしいことができるなんて、一体何がこの人を動かしたのか、という疑問を抱かされたりするのです。

普通の人間が、もっと素晴らしいことに、もっと偉大なことの方にますます開いていく。一体何が彼・彼女の中で起こったのでしょうか。何によって人は自分の限界を超えて遙か遠い所にまで目を向けるのでしょうか。モチベーションと言いましょか。

「何だ、大したことないじゃない」という反応や、「まあ、適当にいいんじゃない、どっちみち

一緒だから」という態度から、これを精魂込めてやっていかないと、という風にわたし達を頑張らせるもの。それを、わたし達は愛と呼ぶのです。「何だ、愛か」とおっしゃるかもしれません。

映画の話になりますが、ある偏屈な男が一人の美しい女性のことが好きになり、悶々した挙句、彼女にこう打ち明けるのです。

「俺は変な人なんだけど、貴方の為より良い人になりたくなりました」と。

わたし達を動かしていくもの、それが果てしなく深い愛というものであって欲しいのです。様々なことで傷つき、時には怒りさえ覚えることでしょう。しかし、大事なのはその怒りを抑え込んでしまうのではなく、その感情が一体何を意味するのかをイエス様と一緒に静かに顧みることでしょう。闇に満ちていた所に光をもたらすことです。

わたし達の中のすべては神様が創って下さったもの、つまり、良いものです。何も否定せずに、受け入れること。しかし、言葉では容易く、幾らでもできるように思えるのですけれども、実際にできるかどうかは別の問題です。道のりはまだまだ遠いかもしれません。

夜になり、町の明かりが灯されていく時間になると、騒然とした、明るい昼間には見えなかったものが見えてくるような気がします。けれども、恐れずに、勇気を持って神様が創って下さった人間というものを、自分という宝物を見つめてまいりましょう。

自分がよりよく見えてきては、次第に人々のことが見えてくるまで。